

# 令和4年度 仙台市立古城小学校 校内研究計画

## 1 研究主題

### 自ら考え、自分の思いや考えを伝え合う児童の育成

～国語科における伝え合い・話し合い活動を中心とした指導を通して～

## 2 主題設定の理由

### (1) 教育の今日的課題から

「言葉はコミュニケーションの礎」となるものである。人は言葉で考えたり、思いや気持ちを相手に伝えたりする中で、日々生活している。今日、我が国も知識基盤社会・グローバル化の時代であり、競争が激しい社会である。その中で生きる子どもたちにとって、人間関係力や社会性がとても大切であり、家庭や地域社会において、集団社会体験や人間関係体験を行うことの重要性が改めて叫ばれている。「伝え合う力」は、人間関係を築く上でも、社会生活を営む上でも、きわめて大切な資質・能力ある。

小学校学習指導要領「国語」では、教科の目標として「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語を適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」としている。そしてその一つとして、「日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。」ことが目標に位置付けられている。

本研究のねらいは、国語科における「伝え合う力」を高めるとは具体的にどのような変容を児童に期待するのかを明確にし、「伝え合う力」を高めるための指導の工夫等を明らかにすることである。

### (2) 本校の教育目標から

本校では、教育目標「豊かな心を持ち、心身ともに健康で、自ら学ぶ子どもの育成」の下、「かしこく」「やさしく」「たくましく」という児童像を掲げている。「かしこく」では、日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにすること、「やさしく」では、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養うこと、「たくましく」では、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養うことと関連していると考えられる。

以上のことから、効果的な国語科の学習活動を通して、自ら考え、自分の思いや考えを伝え合う児童の育成は、本校の目標を具現化する上で重要であると考えられる。

### (3) 児童の実態から

本校は通常学級が12学級、特別支援学級が3学級の中規模校である。元気で明るく素直な児童が多い。国語科の授業の中では、進んで考えを発表する児童が見られる反面、自分の考えを持つのが難しかったり、持っても伝えられなかったりする児童も少なくない。日常生活の中でも、意見の異なる友達と折り合いがつかず、度々言い争いになってしまう児童もいる。そこで、自分の考えを持って、適切に相手に伝える力を伸ばしていきたいと考え、本主題を設定した。

### 3 研究の基本的な考え方

#### (1) 研究主題について

##### ①「自ら考える」とは

小学校学習指導要領「国語」では考える力については、第1学年及び第2学年では「順序立てて考える力」、第3学年以降では「筋道立てて考える力」の育成に重点を置いている。

そこで低学年においては、時間的な順序や「始め—中—終わり」といった話の構成に関わる順序などを考えられる児童、第3・4学年では、相手に伝わるように、理由や事例を挙げ、話の中心が明確になるように話の構成を考える児童、第5・6学年では、自分の立場や結論などを明確し、事実と感想、意見とを区別するなど、話を構成できる児童の育成を目指す。

##### ②「自分の思いや考えを伝え合う児童」とは

低学年においては、互いの話に関心をもって聞き、話の内容を理解したうえで話題に沿って話したり、再び聞いたりすることができる児童、中学年においては、互いの意見の共通点や相違点に着目し、一つの結論を出したり、話し合われたことに対する自分の考えをまとめたりする児童、高学年においては、話し合いを通して様々な視点から検討し、自らの考えを広げたり、互いの意見の共通点や相違点、利点や問題点をまとめたりすることができる児童の育成を目指す。

#### (2) 本研究で目指す児童の姿

- ・いろいろな人に進んでかかわり、自分の良さや友達の良さを認め合うことができる児童
- ・自分の思いや考えを適切に表現し、互いの考えを尊重しながら、よりよい考えを見つけようとする児童
- ・学習を振り返り、身に付けた力を生活の中で生かす児童

#### (3) 研究のねらい

国語科の授業実践を通して、児童一人一人が自ら考え、自分の思いや考えを伝えようとする力を伸ばすために、効果的な授業の在り方を探る。

## 4 研究の視点

【視点1】分かりやすく伝えるための工夫

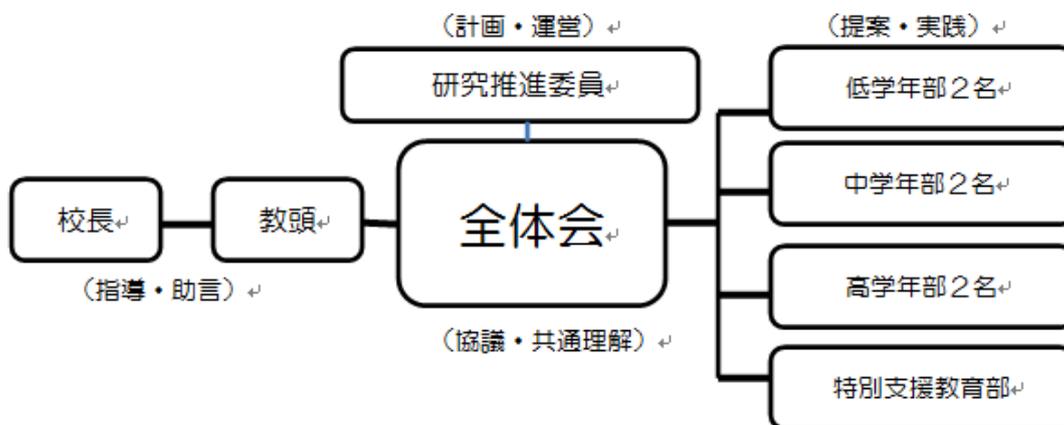
- ・話題の設定や集めた材料から必要な事柄を選んだり，その内容を検討させたりするための工夫
- ・話の内容が明確になるような構成の工夫
- ・適切に内容を伝えるための音声表現や資料活用の工夫
- ・一人1台端末の利用
- ・伝える学習の日常化
- ・場設，学習形態，ワークシート，思考ツールなどの工夫。

【視点2】しっかり聞き取り，考えをもつための工夫

- ・話し手が伝えたいことと自分が聞く必要があることの両面を意識させる工夫
- ・進行を意識して話し合い，互いの意見や考えなどを関わらせながら，考えをまとめたり広げたりさせるための工夫
- ・一人1台端末の利用
- ・伝える学習の日常化
- ・場設，学習形態，ワークシート，思考ツールなどの工夫。

## 5 研究組織

(1) 組織



(2) 研究推進委員

学年部	推進委員
特別支援部	小畑
低学年部	鈴木 坂本
中学年部	片倉 濱塚
高学年部	奥山 小野寺

※各学年から1名。学年部ごとに2名が担当し，うち1名はどちらかの学年主任とする。

## 6 今年度の研究について

### (1) 研究授業について

- ・各学年部から全校授業を1本公開する。
- ・全校授業は、基本的に全員で授業参観をする。
- ・全校授業後に事後検討会を行う。
- ・全校授業の授業者でない学級担任は、一人一授業を提供し、学年部内で参観する。ただし、他学年部であっても時間の都合のつく限りで参観することができる。
- ・学年部授業については、参観者はコメントカードを記入し、授業者へ渡す。

### (2) 指導案について

- ・指導案はA3の1枚で、補助資料は別紙にする。

(書式・・・全職員共有→08学習指導・研究部→10校内研究→令和4年度研究関係→④指導案)

### (3) 研究集録について

- ・研究集録の製本は行わない。各自参考資料や指導案、研究だより等をファイリングする。また年度末にPDFで共有する。

### (4) その他

#### ○目指す児童像の実現に向けて

- ・教師の普段からの授業づくり
- ・子供達の実態を踏まえた授業づくり
- ・授業の成果と課題を共有化し、次回へ生かす意識付け

#### ○シンプルな研究へ

- ・今までやってきたことを確かめる→今あるものを、よりよいものへ
- ・指導事項をしっかり押さえる

#### ○「見える」「つなぐ」研究へ

- ・他学年のことが分かる研究に  
(指導案検討会への参加，事前授業の参観，事後検討会への参加などを通して，他学年の課題を自分たちの課題として共に考え，実践に生かす。)
- ・授業参観
- ・研究だより
- ・研究のまとめ・・・授業終了後，2週間以内を目処にまとめの執筆を行う。

(書式・・・全職員共有→08学習指導・研究部→10校内研究→令和4年度研究関係→研究のまとめ)

(5) ここがゴール！目指す児童の具体の姿！

令和4年度	目指す児童の具体の姿
特別支援部	<ul style="list-style-type: none"><li>・自分の思いを ICT 等を活用し，様々な手法を使って伝えることができる子供。</li><li>・友達の話に関心を持って聞く子供。</li></ul>
低学年部	<ul style="list-style-type: none"><li>・相手の話に関心を持って聞き，共感し，感想を伝え合うことができる子供。</li><li>・自分の気持ちや考えを声の大きさや速さを工夫して伝えることができる子供。</li></ul>
中学年部	<ul style="list-style-type: none"><li>・自分の考えを持ち，相手に伝えることができる子供。</li><li>・自分と相手の考えを比べ，共通点や相違点を見つけて，考えを整理することができる子供。</li></ul>
高学年部	<ul style="list-style-type: none"><li>・根拠を明確にし，自分の考えを持ち，色々な方法で表現することができる子供。</li><li>・他者の考えや思いを受け止め，自分の考えと比べ，認めることができる子供。</li></ul>

(6) 実施計画

学期	月	主な学校行事等	全校授業・学年部授業予定
一 学 期	4	入学式・1学期始業式	中学年部（片倉先生）
	5	野外活動・修学旅行	
	6		中学年部（小野寺先生）
	7	子供集会	
	8		
	9	陸上記録会	特別支援
二 学 期	10	学区民運動会・2学期始業式	低学年部（久保田先生）
	11	くすのき発表会	
	12		
	1		
	2		
	3	卒業式・修了式	